
JEALOUSY

岩瀬 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J E A L O U S Y

【Nコード】

N O 6 7 3 B

【作者名】

岩 渕 心

【あらすじ】

高校を卒業する、仲良し4人組のシュウ、フユヒト、ハルナ、ナツコ。卒業後はダブル同棲の予定。交錯する恋。若者の心にせまる青春小説。その後はいったいどうなってしまうのか…。

第1話

体の芯から冷える寒さもどこへやら、小春日和の季節、卒業する日が来た。三年間通った本橋高校とも今日でお別れだ。

登校時間はいつも一緒だったので、家から歩いて三分ほどの所にあるマックでいつも通り友人を待つ。いつも通り遅刻をするフユヒト。キャッチボールをするくらいの距離からわざとらしく小走りする。

「おはようシュウ。最後まで遅刻しっぱなしだな」

「おう」

いつも通りで卒業の実感が湧かない。ただカバンがない事だけが何か物足りなく、寂しい。いつもならばもう二人一緒の、仲良し四人組で登校している。

詳しくは、俺の彼女のナツコと、フユヒトの彼女のハルナだ。今日は、女の子だけで行くと、昨晚の夜にメールが入っていた。

二人で歩いていると、フユヒトが

「ちょっと寄っていい？」

と、コンビニへ行った。フユヒトはどの使い捨てカメラを買うか悩んでいる。俺は雑誌を立ち読みしていた。

四月から四人で上京して新生活が始まるうとしているので、インテリア系の本を読んでいた。

そこにケータイが鳴った。メールだ。メールを見たら

「校門で待ってるから」

とナツコから。フユヒトをおだてて、二人は足速に学校へ向かった。

第2話

学校に着くと、

「卒業式」

の看板がある校門の所に、見慣れた二人が手を振っていた。ハルナとナツコだ。

まだ、あどけない笑顔がまぶしく、彼女達が太陽ならば、俺達は光合成をしている植物のように、急にテンションがあがってきた。

元気が出てきたフユヒトと俺は、朝の腫れぼったい顔に血が流れていく。

ハルナとナツコが

「おっはよっ!」

と、挨拶した。フユヒトと俺も高校生最後の、若い笑顔で答えた。

「っはよす!」

卒業式という事と、別々に登校したと言う事があって、何故か気恥ずかしい雰囲気だった。

俺は話を切り出した。

「今日、高校卒業して、この春から俺ら四人で暮らす訳だ。みんなそれぞれやり残した事のないように。つらいだろうけど友達との別れも乗り切ろうな。」

そう言うとフユヒトが

「そうだなっ。シュウはモテるから、色んな女関係を整理しないといけないなっ。なんてねー。」

「バーカ、そういう意味じゃねーよ。」とは言ったものの、横目で見なくても、俺の彼女のナツコの冷たい視線が俺に刺さっているのがわかる。

フユヒトのヤロー、余計な事言いやがって。

この春からは四人暮らしが始まる。引越しは三日後に迫っている。過酷かつ過密なスケジュールだけど、俺は引越しの準備はまだしていない。

正直、間に合うのか自分でも不安だった。

もしかしたら18年間生まれ育ったこの町から出て行きたくない気持ちこそそうさせているのかもしれない。

仲良しの四人は、テレビはここに置こうとか、冷蔵庫はこことか、コンビニは近くにあるかなど、春の浮足立った話を楽しくしながら、教室へと向かった。

第3話

下駄箱で靴を履き替え、階段を登り、二階にある三年の教室に向かい、長い一本廊下の左側に教室が並んでいる。

まず、二組のフユヒトが

「じゃ、また帰りにな」

と言って背を向けた。次に四組のハルナとナツコが

「また後でネ」

と言って別れた。

俺は一番端っこの七組だから、三つの教室の横を、朝のスズメの群れを思わせられながら一人で歩いた。

教室に着いて、扉を力強くスライドさせた。手はずれて

「スパーン！」と、教室中に響きわたった。クラスみんなが、雑談をやめ、まるで生まれたての猫が初めて目にするものに興味を持った様に、約二十匹、いや二十人の目が俺を見ていた。

「みんな、お、おはよう。ごめんね。今日でみんなともお別れだ。

今日までありがとう」

と言ったら、話した事もない、絵に書いた様なブスが

「シュウと会えなくなるのさみしいっ！みんなともだけど」

：誰だおめえ！って感じだった。しかし今日で学校生活も終わりと考えたら、どうでもよくなった。

みんなは、また雑談に戻った。

クラスの中に、斜め向かいの家で、幼稚園からの幼なじみの美雪が話し掛けてきた。

「式が終わったら、一緒に校舎の中一周して、思い出に浸ろうよ。

最後になったから、色々話しておきたいし」

そんなこと言うヤツではない。いつものおバカキャラもどこへやら。

いつもより少しだけ女らしかったからOKした。

式が始まる十分ほど前だったので、美雪と一緒に教室を出た。

第4話

体育館を覗くと、在校生約四百人が椅子に座っている。

それを挟む様に窓側に父兄の人達。

ステージの横には来賓の人達。

全員で八百人ほどいるだろうか。

教頭先生の司会進行で、式は始まった。

「卒業生入場」

その合図で、吹奏楽部の演奏が始まり、卒業生が入場した。約六百人の視線を感じたまま席に着いた。

どこにでもあるような、誰もが経験した、緊張の中での気怠さ。

数人の長い祝辞やら何やら。

眠気さえ感じる俺の頭の中は、美雪の事を考えていた。

カワイイのは確かだが、昔から二人で夕飯のおつかいに行ったり、遊びに行ったり、ご飯食べに行ったりするのが当たり前で、兄妹の様な感覚だったので、改まって誘われると、緊張した。もうお互い子供でもない。俺は一瞬、一人の女性として見てしまったのかもしれない。

校長の話も終わり、校歌斉唱で式は終わった。

教室に戻り、泣いている人や、卒業アルバムの最後のページに、友達の名前を片っ端から書いてもらっている人もいる。他のクラスの奴までいるくらいだ。俺も何人かに書いてくれと言われたが、有名じゃあるまいし、いいよ。と言って断った。本当は、美雪の事で頭は一杯だったみたいだ。

美雪は窓際で、女友達と話していた。その五人の中に割って入って

「美雪、行くなら行こう」

と、俺から誘った。美雪は照れながら黙って頷いた。

当然の事ながら、他の四人は俺達を冷やかしている。俺は気にもしないまま、俺の後ろで小さくなっている美雪を連れて、校舎一周に出掛けた。

第4話（後書き）

お手数ですが、読み終えた後に、評価や感想を書いて頂けたら、今後の向上に繋がりますので、ご協力の程、宜しくお願いします。

第5話

教室を出て、どこへ行けばいいのか分からなかった。思い出の校舎だから、どこへ行っても思い出の場所だ。一つ一つの場所にストーリーがある。

そんな少し昔のストーリーを思いだしそうな時に美雪が言った。

「私のわがまま聞いてくれる？」

「いいよ。何？」

今日くらいは構わない。卒業してお別れだからだ。

「テニスコートに行きたいの」

「テニスコートか。いいよ、行こうか」美雪はかわいい笑顔でニコッと笑って、

「ありがとう」
と言った。

約三年間テニス部に所属していた。

持ち前の明るさと、優しさ、元気のよさで先輩後輩問わず、みんなに慕われ、二年の終わりに推薦で女子テニス部長にもなっていたので、思い入れは強いに違いない。

テニスコートの脇の、試合の時は監督とコーチが座るベンチに座った。

何だかいつもと違う美雪が横にいると思うと緊張する。「美雪は春からは女子大生？」

「違うんだあ。頭悪いから、大学はいかないの。」

「そっか、バカだもんなあ」

「ちよっとお」

美雪が頬つぺたをフグのように膨らませている。

「冗談だよ。じゃあ就職するの？」

「ううん違う。アパレルの専門学校に行くの」

「そっかぁ。アパレルか。美雪は昔からオシャレだったもんな。これからはお互いの道へ歩き出して会えなくなるけど、がんばる…」

横で鼻をすすっている音が聞こえて、言葉がつまってしまった。美雪が泣いている。

「どうした？寂しいのは…」

俺もだ、と言ったが、美雪の大声にかき消された。

「ちがうもんっ！私は、ずっと…ずっとずっと昔から、シユウの事が好きだったんだもん…。いつも二人でいる時はデート気分だったんだよ。ただの幼なじみだなんて思った事ないんだからね…」

俺たち二人以外に誰もいないテニスコートに強い風が吹いた。

一瞬頭が真っ白になったが、春風が妙に温かく感じたのは確かだ。

第5話（後書き）

よかったら、評価や感想をお願いします。

第6話

思いがけない告白で、ビックリしてた。

ナツコよりも前から、自分の事を思ってくれる人が、こんなにも近くに居るなんて思いもしなかった。

「これからお互いに違う道に行くんから、寂しい気持ちは俺も一緒だけど、美雪の気持ちにはこたえられない。ナツコもいるから。」

「わかってる。シュウの事は思い出の1ページに残しておきたいんだ…。私の中の大切な思い出…」

と、突然顔が近づいてきたと思ったら、キスをされていた。複雑な心境だが、俺も目を閉じて感情を込めた。

何故だかわからないが、そうしないと後悔しそうな気がしたのだ。

春の風が二人を引き離す様に、顔の間を吹き抜けた。顔が離れて少し沈黙が続いたが、俺は聞いた。

「前に言ってた、初恋の相手を今でも思ってるって言ってたよな？」

「うん。相手には彼女がいて、邪魔はしたくないけど、諦める事も出来ないって言ったよ」

「じゃあそれは…」 「もちろんシュウだよ！胸がはち切れそうな位になって、私なりに考えて、邪魔しないように、遠回しに告白したの」

「ごめん。全然気付かなかった」

「ううん。いいの。私が少しでも気持ちが落ち着けたから。結局最後に告白してしまったけどね」

「もう少し早く言ってくれば…」

「ん？なあに？」

と、俺の口が勝手に呟くように喋っていた。

俺は変な事を考えていたようだ。

慌てた俺は、

「俺、何か言った？」

と答えてしまった。

「変なの」

美雪は気付いていない。よかったような、聞いていてほしかったような、変な気持ちになった。

それから五分ほど雑談をして、連絡はとれるようにと、携帯電話の番号とEメールアドレスを交換した。

満面の笑みを浮かべた美雪は、

「今まで、くだらない相談とかのってくれてありがとう。シュウも頑張ってたね。私、そろそろ行くね」

と言ったが、やっぱりどこ寂しそうだ。

重そうな足どりで、思い出がもうひとつ詰まったテニスコートを出て歩いて行った。

なぜか俺は美雪に告白されて、：嬉しかった。まあ嫌がる人なんていないか。

でも待てよ？これは浮気か？いや違うだろ。

でもナツコには言えないわな。

そんな変な気持ちで、高校生活は終わりを迎えた。

第6話（後書き）

へ作者より＼よろしかったら、評価、感想、メッセージをよろしく
お願いします。

第7話

誰もいないテニスコートで一人そんな事を考えていたら、俺の携帯電話が鳴った。ゲッ。

画面に点滅しながらナツコの表示。

携帯電話が重く感じた。通話ボタンを押した途端に聞き慣れた声が耳に入ってきた。

「ちよつと、教室にもいないし、友達に聞いたら、美雪ちゃんと出て行ったっていうじゃん。どこにいるのよ」

「テニスコートにいる」

「まさか告白されたの!？」

「違うよ、ただ思い出話して、お別れを言ってただけだよ」

「ホントに? 嘘だったら許さないからね! もうみんなシュウ待ちなんだからね」

ナツコばかりに夏の陽射しの様にカッとなっている。

「わかったよ。じゃあ、10分後にコンビニで待ち合わせね。じゃあ」

と、伝えて一方的に電話を切った。

夢のようなひとときは、電話によって現実に戻された。

実は、キスされた! なんて、ぜってー言えねえ…。

この事は胸にしまっておこう。

春の清々しい陽気。

雲が無い空の下、これから上京して四人で暮らす事を考えながら、テニスコートを出た。

いつも通っていた道さえも思い出になっている。

コンビニに向かう道で、1年の時の同じクラスの太陽と、おそらく年下の彼女に会った。

「よお! シュウ。さっき美雪ちゃんと二人で廊下歩いて行くの見たぜ。モテるんだからあゝ」

相変わらずお調子者の太陽。

「そういうんじゃないよ」

「まあ、元気でね。俺は専門行くからさ。また会おうね」

隣にいた彼女が、恥ずかしそうに会釈をして、二人は帰って行った。後ろ姿を見送ったが、二人は春爛漫と言う言葉がお似合いだった。

第8話

太陽たちを見送って、コンビニに近づく、ナツコがファッション誌を立ち読みしているのが見える。

横にはハルナとフユヒトもいる。

目を合わせづらい。

男は、少しでもやましい事があると、目を合わせづらくなるものだと、俺は思う。

ハルナが俺に気付いて、三人がコンビニから出てきた。

ナツコはちよつとムスツとしてハルナの半歩後ろに隠れている。

その空気を察してか、ハルナとフユヒトが司会進行でテンポよく話を始めた。

「俺らもついに人生の分岐点とよばれる所にきた訳だ」

「そうだね。これから四人で暮らすだもんね。フユヒトも、シュウとナツコの邪魔しちゃだめだよ」

こんな時に限ってハルナの発言は空気が読めてない。

「こっちこそ邪魔しない様にしないと、なあナツコ」

と、俺の発言は火に油、いやガソリンを注いだみたいだ。もちろん怒りが爆発した。

こうなるともう止まらないのがナツコ。

「そんなのわかってるよ。邪魔なのは私じゃないの？美雪ちゃんと一緒に住めばいいじゃない。もう知らないからっ！」

と言い捨てて、走って行ってしまった…。

フユヒトが不器用な俺をカバーしてくれた。

「何やってんだよー。早く追い掛けて、ちゃんと話あってこいよ。」

美雪ちゃんの事、ナツコ結構心配してるみたいだから」

「ああ。女ってのは色々で難しなあ」

と、言うとは今度ハルナの攻撃。

「難しく考え過ぎなんだよ。だから難しく思うの！女の子は単純な

んだから」

もう逃げ場を失った俺は、フユヒトとハルナに背中を押されて、渋々ナツコを追い掛けて走り出した。

第8話（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。また読んでくださ
いね☆

第9話

三百メートルほど走っただろうか。

とぼとぼと歩いているナツコの背中が見えた。

俺はナツコの背中に言葉をかけた

「ナツコー。ちょっと待って」

ナツコが振り向いて待っている。

俺は息を切らしながら言った。

「ナツコ、ごめんね。連絡入れないで美雪と二人で会ってて」

「いいの。私のヤキモチだから。シュウの気持ちさえ離れてなければ」

涙ぐんだナツコの目は、兎の様に赤くなっていた。その時、俺はこれでいいんだろうかと、頭の中では考えていたが、今は目の前にいるナツコの事だけを考えるようにした。

何も言わず、無言でナツコを抱きしめた。

それと同時に、ナツコの目が氾濫し、涙を流しながら言った。

「もうバカっ！女の子はそういうの不安になるんだからね、そういうの」

「うん。ごめんね」

道端で抱きしめていて、車道を挟んで反対側の歩道で、フユヒトとハルナが俺らをみて、よかったよかったと、頷いている。

俺も二人に目で合図をした。

「帰ろうかナツコ」

しっかり絡めて離れられないような、カップル手つなぎをして、俺とナツコは歩き出した。

「引越しの荷造りしなきゃいけないんだよ。実はまだほとんど手をつけてないんだよ」

「えっ！まだやってなかったの？それ間に合うの。私はもう終わってるから、手伝いに行くよ。おばさんにも挨拶したいしさ」

「じゃあこのまま行こうか」

「うん、そうする。二人でやればすぐ終わるよ」

今日、学校であつた美雪との事など、なかった事のように、二人は楽しく会話をしながら、俺の家に向かった。

第9話（後書き）

（作者より）

！評価だけでも歓迎です！

ぜひ感想をお聞かせ下さい

第10話

俺の家は、町の主要道の脇道に入ってすぐの所だ。家につくと母親が出迎えた。

「あら、お帰り。なっちゃんも一緒だったのね。ゆっくりしていつてちょうだいね」

「おばさんこんにちは。お邪魔します」

「お昼御飯作るから少し待っててね」

といって、母さんは自分のホームグラウンドのキッチンへと消えた。

俺は、三階の自分の部屋へ案内した。
一息もつかずに引越し準備を始めた。

「ナツコ、手伝ってくれて、ありがとな」

「ううん。気にしないで。シュウの部屋は知らない物が少ないから、すぐ片付くよ」

たしかにナツコの言うように、知らない物は少ない。

いつか捨ててしまうものなら、最初から無い方がいいと思ったから。
作業は思った以上にはかどり、あと一步で終わる所で、まるでベンチから指示を出しているかのように

「ご飯できたわよ！ひと休みしましょう」

と聞こえて、手を休め、グラウンドいや、ダイニングキッチンへ向かった。

テーブルには既に用意がしてあった。

ご飯、お味噌汁、卵焼き、肉じゃが、辛子明太子、漬物と、かなり和が強調されていた。

それを見るやいなやナツコは、

「あつ、手伝いもしないでスイマセン…」

「いいのよ、気つかわないで。さつ、食べましょうよ」

「はい、いただきますーす」

俺は無言のままだ。やはり、自分の彼女が母親の前にいるのは、少し恥ずかしいものだ。味噌汁をすするといつもと違う味がする。思わず俺は言った。

「今日のは旨いな」

慌てたそぶりを見せずに言い返してきた。

「何言ってるの。いつもと変わらないわよ」

そこで俺は知った。

ナツコに料理で見栄を張っているんだ。

ナツコもそれを察してか、

「おいしいですね！今度作り方教えて下さい！」

と言った。出来る子だ…。母もなんだか、嬉しそうに見えた。

第10話（後書き）

作者より
い。

よかつたらまた見てくださ

第11話

食事中に二人は内容の薄い会話をしている。

気が合うらしい。

俺の兄弟は、21歳の兄と、15歳弟で、俺は真ん中。

女兄弟がないせいか、母さんはナツコを好いている。

ナツコも優しいお母さんと言っていた。

二人はいい付き合いをしていくだろうと思う。

いつか二人に、俺だけ責められる想像したが、嫌になりそうだから、すぐにかき消した。

母さんが、

「これから四人暮らしするのはいいんだけど、なっちゃんてさえ迷惑かけてるのに、他の二人に迷惑かけちゃダメよ」

「一々言わなくてもわかってるよ。ガキじゃあるまいし」

すかさずナツコが、こんな時に言うことが違う。

「私もみんなに迷惑かけると思うんです。でも、みんなで助け合って生活していくから意味があると思うんです」

と、ナイツフォロー。

「そうね。いい事言うわなっちゃん」

母さんも言い返す言葉なし。勝利っ。

ご飯を食べ終えて、自分の部屋に戻った。

きれいな部屋の荷物が片付いて、すごく広くなった気がした。

下ではナツコは母さんと食器を洗っている。

俺は一人でベッドに横になって天井を見上げた。この部屋で色々な事があった事を、少しだけ思い出してみた。

親子喧嘩もしたし、泣いていたりした時もあった。友達を呼んでバカ騒ぎをして、網戸に手を突っ込んで破ったやつもいたっけ。そんなことを考えていたら、うとうとしてきた。

子供の頃から、俺の成長を、寝ているときでも見ていた天井。もうこの部屋ともお別れだ。

さよなら天井さん…。

と、バカな事を考えながら、使い慣らしたベッドの上で、意識を失うように眠りについた。

第12話

どのくらいの時間寝ただろうか。体を揺すられ、目を開けると、ナツコがいた。

「早く準備終わらせて、遊びに行こうよ」

そんな事言われても、まだ寝ぼけ眼で、瞬きが返事になっていた。ナツコもベッドに横になり、甘えてきた。俺の胸にうずくまるように抱き付く。

こういう時は、甘い言葉を囁くのが女性にとってはうれしいはずだ。

「これから心配事や悩みが沢山出てくると思う。そんなときもずっとナツコの横に居たいんだ」

キマった…。と思った。

「もうバカな事言っていないで早く起きて手伝って!」

あらら？全然効果がないみたい。こっちまで冷めるわ。

ナツコに手伝いに来てもらったはずが、いつのまにか俺がナツコを手伝っていた。まあいいか。

ナツコはテキパキと作業をこなし、ものの一時間もしないうちに、引越しの荷物をまとめてしまった。

「疲れた。でも終わってよかったよ。ナツコのおかげだよ。ありがとう」

「ねっ、早く終わったでしょ！やればできるんだよ。少し休んで遊びに行きたいなあ」

「そうだな。ひと休みしてからな」

俺は心の中では、ひと休みどころか、眠りにつきたかったが、ナツコはそうはさせてくれないのはわかっていたので、了承するしかなかった。

色々思い出があるこの町ともお別れだ。

テーブルの上に、子どもの頃に誕生日に親からもらった大切なオルゴールがあって、最後の荷物として段ボールに入れようとしたが、なぜかいつもより重く感じられた。

第13話（前書き）

読み終えたら評価を忘れずをお願いします！

第13話

二人でくつろぎながら話していると、ナツコが言った。

「私、ハルナに電話してみる。まだ終わってなかったら手伝いたいしき。いいでしょ？」

「ああ、いいよ」

使い慣れた携帯を鞆から取り出し、短縮ダイヤルで、携帯を持ってわずか2秒。早い。お前は早撃のプロかよっ！…。
こころの中でツツコミを入れて虚しくなった。

そんな事を思っ間ハルナが電話に出たのが、離れていた俺にも、声の大きさを確認できた。「今なにしてた？」

うん、うん。あ、終わったんだー。じゃあ10分で行くね」

と言って、撃ち終えた銃を鞆に収めるかの様に素早く鞆に入れた。
やっぱり早い。

「ハルナとフユヒトも、荷造り終わって、もうファミレスにいるんだって。」

「ファミレスね。何かちがうところに行きたいけど。着替えるからちょっと待ってて」

「早くしてね。私は下にいるから」

そう言ってナツコは部屋から出て行った。俺は着替えながら、明日からはもう見れない、見慣れた窓の外の景色を見た。子どもの頃から見てきた町並み。

景色は何も変わらないのだが、自分の目線が高くなり、窓の外の景色が妙に小さく見えて、素直に喜べなかった。

着替えが終わり、段ボールだらけの部屋に、

「俺がこの歳になるまで一緒に過ごしてくれて、ありがとう」

と、とても小さな声で呟き、ファミレスではハルナとフユヒトが。下ではナツコがまっているので、扉を閉めて足速に階段を降りた。

第13話（後書き）

いろいろな意見や感想お願いします。
評価も…。
より

岩渕

第14話

着替えが終わり、1階におりてナツコを探していたら、母さんに挨拶していた。

俺は気にもとめず、足音で自身の存在をアピールして、玄関で靴を履いていた。

ナツコと母さんの話が終わり、近づいてきて、

「あまり遅くなるんじゃないよ。なっちゃんちゃんと送ってきなさいね」

と、俺の背中に言った。ナツコは丁寧に

「おじやしました。お昼ごちそうさまでした。また遊びに来てもいいですか?」

「いいわよ。今度きたときは、私の得意料理教えてあげるわね」

「ありがとうございます。楽しみにしています」

と、きちんとお礼を言っていた。

母さんは上機嫌で

「いってらっしゃい。気をつけてね」

俺は振り返りもせずに歩き始めた。

少し遅れたナツコが、コツコツコツと後方からローファアの引きずる音が聞こえてきて、俺の横で止まった。

「もう。まっててくれてもいいでしょー」

と、息を切らしている。そんな事は関係なく、俺は話をする。

「フユヒトとハルナはうまくいつてんのか？」

「だっ、大丈夫なんじゃないかなー。あまり分らないけど。一緒にいて幸せそうだしさ、それにハルナも楽しそうだよ。何か気になる事でもあったの？」

「いや別に、何でもないけどさ」

何か気にはなったが、深くは考えなかった。

太陽の光りも橙色に輝き、影が自分達の後ろ長く伸び、どこまでもついてくる。二人の影が1つの太く、大きな影になりながら、フユヒトとハルナが待つファミレスに向かった。

第14話（後書き）

毎回読んでくれてる方、今回初めての方も、ありがとうございます。
た。

第15話（前書き）

ずっと執筆しなくてスイマセンでした。これからもよろしくお願
いします。

第15話

ファミレスまで、約束通りに着いた。

お店に入ると、フユヒトとハルナが窓側の一番奥のテーブルで、隣同士で座って手を振っている。仲よさ気なのは俺らの為にか、自分らの為にか分からない。

席につくとハルナがナツコにウインクしているのが分かった。そのウインクの意味は誰もがわかるだろう。俺の中での解釈も一緒なはずだ。

が、有難迷惑ながら口に出して答え合わせをしてくれた。

「よっ。あの後仲直りしたのか？微妙な気持ちで上京しても、楽しくないからな」

と、言った後に、フユヒトの左頬と左眉毛の辺りがピクツと動いた。まうた余計な事言うから、ハルナの必殺のミュールで足を踏みねじられているんだろう。

ナツコが言った。

「うん。もう大丈夫。私も悪かったんだ」

その言葉を聞いてハルナに力が入り、それに連動してフユヒトの顔はさらに歪んだ。

俺はそんな三人を横目に、押しボタンでウェイトレスを呼んだ。その後、日が沈でも、飲んで食べて色んな話を話した。

夜も8時前くらいに会計をして、四人で店を出た。ハルナが

「あと2日はフリーなんだね。四人で何かしようか」

と言うと、ナツコが

「いいね。ボウリングとかゲーセンとかカラオケとかやろうかー」

と答えた。俺とフユヒトはもう、何も言えずにおまかせ状態だった。

二組ずつに別れて、帰りはハルナと一緒にだ。家の方向が一緒だから。フユヒトとナツコは1分くらい一緒に、すぐに別れる。こっちは約7分弱は一緒。

「今日は色んな話したね。楽しかったー。こんな日がこれから毎日続くと思ったら私楽しみだよ」

「そうだな。最近フユヒトとうまくやってるのか？」

「うん…。それがさ、先週くらいからおかしいんだよ。いつもならすぐに返ってくるメールがなくて、聞いたら寝てたって、夜の8時だよ？疑いたくないけどあやしいよね」

「そうなの！？じゃあ明日の予定変更だ。フユヒトを監視しよう」

「えっ。でもそれって完全に疑ってるって事になるよ。フユヒトに怒られるよ」

「いいのいいの！バレなきゃさ。真実を見れば疑いが晴れるだろ？」

「うん…。わかったよ」

探偵みたいで興味がわいて、乗り気じゃないハルナを無理矢理説得して、じゃあと言って別れ、明日の作戦を頭の中で考えながら家路についた。

第15話（後書き）

よろしかったら評価・感想をお願いします。

第16話（前書き）

いつもありがとうございます。ごゆっくりお楽しみ下さい。

第16話

引越しまで2日後の朝、午前10時に昨日ハルナと別れた場所で待ち合わせをしていた。

先に家を出る準備を済ませてからくつろいでいると、ハルナからメールが入った。

「今から家出るよっ！」

メールを合図に、まだ眠い顔を朝日で洗った。

ちょうど同じくらいにハルナとに待ち合わせ場所に着いた。

「おはようシュウ。今日はヨロシクね。ナツコとフユヒトには、今日遊べない事になったって言っというたから！」 「ありがとう。助かるな」

「フユヒトにおはようメールを入れておいたから、返ってきたら起きた証拠だよ。メールが来るまでお茶でもしようよ。」

「あつ、俺まだ朝飯食べてないから、食べにいこうよ」

「そだね。どこ行く?…ですよね。ファミレスしかないよね」

もう行き飽きたくらい行っただから、何も言わなくても伝わる…と言うか分かる。

ファミレスに着き、いつもの場所に座った。そしてすぐに呼び出しボタンを押した。

メニューを見なくても、覚えるくらい常連だからできる事だ。

ウェイトレスにサッと注文して、やっと落ち着き、今日の趣旨をおさらいした。

「今日は、フユヒトが最近おかしく、何をしているのか調べる、言わば浮気疑惑調査ってやつだ」

「浮気疑惑！？ちがうよぉ。行動を知りたいだけだよ！」

「わかったわかった。行動調査ネ。じゃあ、家を出てから家に帰るまで、1日尾行しよう」

「そうなるね…」

浮気という言葉に不安を覚えたのか、ハルナが急に暗くなった。いいタイミングで料理が運ばれてきた。

俺が食べ始めた時にハルナの携帯にメールが届いた。

「起きたっ！」

それを聞いて、早く行きたくて、電車に駆け込み乗車する人の様にご飯を口に運んだ。そして二人でお店を出た。

第16話（後書き）

よろしかったら、感想や評価をよろしくお願いします。

第17話

二人で急いでお店を出たのはいいが、よく考えたら、起きたただけで、まだ出かけていない。

「ねえシュウ。あのさ…」

「なに？」

「ううん。やっぱり何でもない。先にフユヒトの家に行って張り込もうよ！」

「じゃあそうするか」

途中まで言いかけた事を飲み込んだハルナを見て、俺まで不安になりそうなオーラがでていた。

でも言うか言わないかは本人次第だから、詳しく聞くことはしなかった。フユヒトの家に行って、家の前の道路の反対斜線の生け垣に身をかくし、フユヒトが出かけるのを待つ。

3分もたたないうちにフユヒトが出てきた。早く来てよかったなどハルナに言った時に、ハルナの不安が爆発したのか泣いていた。

「尾行やめるか？」

「ううん、大丈夫…」

春の晴れた空が、暗い雲に覆われてきた。

ハルナは涙を拭きながら、俺のあとから歩いてくる。鼻を吸っている音を聞くと慰めたくなるが、何もおきていないから慰められない。

数分歩いていると、コンビニに立ち寄ったフユヒト。中で電話をかけながら飲み物のコーナーを見ていて、ウーロン茶を手に取り、足早にレジに向かう。

何か急いでいる。

昨日の登校時と全然違う。

「あいつ誰かと会うぞ。間違いない」

「何で分かるの？」

「あいつがあんなに急ぐのは…」

言葉がつまった。それに対して不安になったハルナが言う。

「急ぐのは何…」

俺は隠してもしようがないと思い、正直に言った。

「女と会う時だ」

それを聞いたハルナはまた泣き始めた。

コンビニの外に出たフユヒトに近づく女性の影…。ナツコ…。ナツコだっ！は？よく分からない。ハルナも俺を見てキョトンとしている。遠く空で、小さな雷鳴が聴こえた。

第17話（後書き）

いつもありがとう！

第18話（前書き）

波乱の幕開けったい（私は博多っ子ではありません）

第18話

コンビニの前に立っていたフユヒトとナツコが歩き出したのに気付かず、一瞬見失いそうになった。

ハルナは止めてくれたが、俺は飛び出して行きそうになっていたみたいだ。

何かの間違いだろうか、相談にのってもらっているんだと、自分にいい聞かせていた。

気を使ってくれたのか、泣いているハルナに慰められた。

「何か、よく分からない状況だけど、向こうから見られて、私たちも変わらないからね。まずはフユヒトの事考えてよ。ねっ」

たしかに。二人のあとをつけた。向かった先は、スパゲティー屋さん。ちょうどランチタイムだった。食べ終わった後は、当初予定していたボウリングに行っていた。あとは、ショッピングもしていたし、マンガ喫茶、夕食を食べ、真面目な話をしている様に見える。そのあとには、まさかとは思ったが、周りになにもないホテル街の方に歩き出していた。夜の空に、俺の心の涙がパラパラと落ちていた。

フユヒトとナツコは、手は繋がらないものの、傍から見ればカップルそのものだ。四人の仲がいいから言ってしまう俺とハルナもそうなのだが…。

「あの二人、ホテル入るぞ。完全な黒だったな」

「…うん。もう分かったから、ご飯でも食べに行こう」

ハルナの目から涙はでていなかったが、すごく淋しげだった。食事とは言ったものの、今日は居酒屋で飲むことにした。

二人で生ビールを頼み、乾杯はせずに飲み始めた。

「俺もナツコがフユヒトとあんな事になっているなんて気付かなかった。何か二人に裏切られたな」

「うん。でも、二人を責めないでね。私たちにも少しは責任があると思うの。私たち四人で、保育園から一緒でしょ。私からしてみればシュウとナツコが友達以上だし、シュウからしてみれば、わたしとフユヒトは友達以上でしょ？」

「まあ、そだな。今日はちょっとお酒の力を借りようか」

「うん…」

飲みながら思い出話や、愚痴をこぼしていて、二人でかなり酔っ払った。

ハルナが甘えるように言った。

「私、フユヒトと付き合ってた頃から、シュウが彼氏だったらって思い描いていたの」

突然の告白で驚いた。外の雨が本降りになってきていた。

第18話（後書き）

またよろしくお願いします！

第19話

俺は返事に困った。

俺ら4人は周囲から美男美女と言われていた。

自分達は思っていないが、たしかにナツコとハルナはカワイイ。

性格もガキの頃からの仲だから、いいところも、悪いところも知っている。

プチっ！

俺の中での鉄製のしゃぼん玉が簡単にハジけた。

「あいつらがその気なら俺だってやりたいようにやってやる。ハルナ、今からホテルいくぞ」

「えっ！今から!？」

「いや、そーゆーんじゃないくて、ナツコとフユヒトと話しに…ね」

「あっ、う、うん。行こ」

ハルナは自分が勘違いして恥ずかしそうに了承してくれた。

これから待つものは修羅場しかないだろう。

居酒屋を出たら雨は止んでいた。重い足取りでホテルに向かいながらフユヒトに電話をかけた。

フユヒトはいつもとかわらない様子だった。

「おうシュウ。どうした？」

「どうしたじゃねーだろ。ナツコとホテルにいるんだろ。何号室だ？ 今から行くから教えろ」

「…。304だ」

「今から行くから待ってろよ」

一方的に電話を切った。無理に隠す事をしないのが、フユヒトのいいところだ。ハルナに言われた。

「怒らないで落ち着いて話してよね」

そんな場合じゃねーよ。言葉は気持ちを隠すことも出来る。

「怒ってねーよ」

だが言動、行動でバレバレだろうが…。

ホテルに着いてフロントで部屋を借りた。

「206号室です」

「はい」

と返事をしてが、真っ直ぐ三階の304号へ向かい、扉をノックした。

カシャ。

すぐに鍵が開く音がした。

第19話（後書き）

よかったら、感想・意見・評価などお願いします。

第20話

扉を開けた所にフユヒトが立っていた。握った拳に力が入る。フユヒトが言った。

「どーぞ入って」

…ここはお前の家か！

無言でドカドカとあがりこみ、ベットのの上にいるナツコに言った。

「どういう事だ？ 最初から説明してくれよ」

「シュウごめん。前から言わなきゃって思ってたの。だけと言えなくて…」

入口の方ではフユヒトとハルナが口論になっている。その二人を呼び、四人で話す事にした。

俺はもう面倒になっていた。

「もう、現状が現状だから、仕方ない。それよりも今後どうするか、どうしたいかを言えよ」

俺はそう言ってフユヒトを睨みつけた。
フユヒトが口を開く。

「俺はナツコと…」

続いてハルナ

「私はシュウがいい」

フユヒトが驚いている。
ナツコは

「私もフユヒト」

3人に言わせ終わって気付いた。
俺はどうしたいんだ？

真っ白の頭の中に小さな光りが見えた。

その光りは一瞬で広がり、言葉で表す事ができた。

「俺とハルナが付き合って、フユヒトとナツコが付き合えばいいじゃない？何か文句ある？」

「…」

「…」

「…」

一同沈黙。

「じゃあいいじゃん」

俺はもう疲れていた。元々司会みたいなものは向いていない。
ナツコが半泣きで言う。

「シュウ、話があるからちよつと外出ようよ…。フユヒトとハルナ達も二人にしてあげたいし、お願い」

決して、うん、とは言っていないが入口に向かった。

ただ帰るからだったのだが、後ろからナツコが来る。YESと勘違いしたのだろう。俺はかなり情緒不安定だったのでナツコの髪を引っ張って顔を近づけて睨んだ。

ドッ！ナツコの顔を見ていたはずが、瞬きをして、次に見えた光景はナツコの膝あたりだった。

「女に手あげてんじゃないよ」

フユヒト蹴にケリ倒されたのだ。

ブチ。切れた。

俺は理性を無くしフユヒトに飛びかかった。

第20話（後書き）

よかったら評価、感想お待ちしております m
〔
m

第21話

フユヒトとベットのの上でもみ合いになり、何発か顔面にきめてやった。

フユヒトも黙っちゃいない。俺の口にきめやがった。口の中が鉄の香りでいっぱいだ。もう終わりにしてやろうと、顎にパンチしようとした時に、ナツコが叫んで、パンチしようとしていた手が止まった。

「もーっ！やめてっ！！私達ずっつと仲良くやろうって決めたじゃん。私が全部悪いんだよ。やるなら私をやってよ。シュウだってハルナと付き合うんでしょ？そしたら文句言えないじゃん」

「……」

言い返せなかった。

振り上げた手を降ろし、ベットに座った。

フユヒトを見上げたが、目線は斜め下を見て動かない。

「…悪かったよ。女に手をあげて」

「もういいよー。一見落着いて事だ」

ベットに吐いた唾が、白いシーツを赤く染めた。

ナツコとフユヒトがベットで寝て、俺とハルナが床で寝ることになった。

自分らの部屋に帰ればよかったのだが、この夜は、今までの四人の関係が終わってしまうのではないかと思い、自分で覚悟を決め、重い空気の中で眠りについた。朝起きると、フユヒトとナツコの姿はなかった。隣で眠るハルナを起こさないようにベットを出ると、洗面台に向かった。

昨日、フユヒトと喧嘩したせい、体が少し痛い。顔も腫れている。でも心は傷ついていない。むしろ幸福感でいっぱいだ。

そうして鏡の自分に微笑みかけていたら、後ろに寝ぼけ眼のハルナが立っていた。

「起きたか。おはよう」

「うん。おはよう」

「とりあえず、ホテルをでようか」

そう言って俺達は身支度をはじめた。

ホテルを出たらドシャ降りの雨が俺達を出迎えてくれた。傘などない。あるのは体の痛みだ。

「絶対止まねーよな」

「うん。仕方ないよ。行こう」

ハルナに手を握られ、ドキッとした自分に気付いた。

もう雨など降っているのも忘れるくらいに幸せだった。もう水分を吸いきったシャツは体に重量感を与えた。

ハルナの家の前まできた。

「四人暮らしの事はオレから話して連絡するよ」

「ありがとう。シュウ、好きだよ。これからよろしくね」

何も言わず、キスをして答えた。

そのあと家についた俺は、玄関先で真っ裸になり、風呂場に直行して鏡を見た。痛い訳だ。

一発目にフユヒトに蹴られた場所がアザになっている。

湯舟に浸かり、今日あった出来事を振り返る。

幸せなのか悲劇なのかよくわからない。

そんな風呂場にたちこめる湯気のような気持ちで風呂を上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0673b/>

JEALOUSY

2010年10月10日04時29分発行